

パネル発表2

2026年2月28日 1日目 オンライン
子どもの日本語教育研究会 第11回大会

内容と日本語の統合学習

「JSLカリキュラム」の現在

—各地の研修から浮かび上がる現状と課題—

齋藤ひろみ(東京学芸大学)

横溝亮(横浜市教育委員会)

今澤悌(甲府市立伊勢小学校)

大菅佐妃子(豊田市教育委員会 「ことばの教室」)



1 パネル発表 の 趣旨

齋藤ひろみ(東京学芸大学)

1 はじめに 今 問われる「指導内容の深化・充実」 「内容と教科の統合学習」による指導の質の向上への期待

文部科学省「外国人児童生徒等の教育に関する有識者会議」(2025年度)
検討項目

資質・能力を育成するための言語教育として「日本語指導」を再定義
「知識および技能」と「思考力、判断力、表現力等」を一体的に育成

→ 日本語と教科の統合学習による指導の質の向上を！

外国人児童生徒等の教育に関する有識者会議 第11回会議 資料1「指導内容の深化・充実に関するこれまでの議論と対応の方向性」
https://www.mext.go.jp/content/20260220-mxt_kyokoku-000047375_01.pdf

しかし、翻ってみると・・・

2003～2007年には、文部科学省により
内容(教科等)と日本語の統合学習という考え方に基づき
「JSLカリキュラム(トピック型／教科志向型)」が開発
既に20年が経過。

なぜ、今、改めて「内容と教科の統合学習」が注目されるのか？
現場で、「JSLカリキュラムは」なぜ実施されていないのか？

1 はじめに 本パネルの趣旨 「JSLカリキュラム」の現状と課題、そして、その可能性

文部科学省の調査「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」(令和5年度)
小中学校・義務教育学校・中等学校・特別支援学校(外国籍在籍9,932校、日本国籍在籍校4,006校)

実施されている日本語指導(イメージ図)



サバイバル日本語	5,533校、
日本語基礎	7,762校
技能別日本語	4,134校
JSLカリキュラム	3,840校
教科の補修	6,299校

パネルの構成: **発題** → 事例を巡る検討 → 全体討論 → まとめ

- 「JSLカリキュラム」の方法論としての特徴・指導担当者が感じている困難(齋藤)
- 「JSLカリキュラム」導入に必要な仕組み・日本語指導担当者の配置・体制整備(大菅)
- 横浜市で実施された「JSLカリキュラム」研修の実施状況と成果・課題(横溝)
- 「JSLカリキュラム」の授業展開のイメージと、実践事例(今澤)

2 「JSLカリキュラム」

言語教育の方法論としての特徴 実施上の困難（研修参加者の声）



齋藤ひろみ（東京学芸大学）

2-1 「JSLカリキュラム」の言語教育の方法論としての特徴

学習項目のリストやその順序が示されている固定的なものではない。
子ども一人一人の実態に即して、教師・指導者が作成することが前提。

(1) 目指す力「学ぶ力」

教科等の学習に参加するための力を「学ぶ力」と呼び、その育成を目指す。

背景には、内容重視の言語教育(CBI: Content-Based-Instruction)の考え方があり、日本語の力と思考力等の認知面の発達を切り離さない。

教科等(内容)の学習文脈に日本語を埋め込んで教育する。

→ 内容(教科等)と日本語の統合学習 (≒「日本語と教科の統合学習」)

(2) 「Japaneas Second Language カリキュラム」の実施時期・位置づけ

初期段階の日本語の学習を終えた後、日本語指導に並行して実施
語彙や文型などの日本語基礎と有機的に組み合わせてる。

(3) 2つのタイプ「トピック型」と「教科志向型」

特定の教科内容を取り扱い、教科の「学ぶ力」を育む「教科志向型」

教科に共通する「学ぶ力」を育む「トピック型」(小学校編のみ)

2-1 「JSLカリキュラム」の言語教育の方法論としての特徴

(4) 活動構成・内容 日本語の支援

	トピック型	教科志向型
活動	体験: 体験をことばで表現する 探求: 課題について探求する 発信: 学習過程や結果を他者に伝える	課題を設定 課題解決を通じて内容を理解 理解を日本語に結び、概念化
	活動参加には具体物の利用や体験、子ども同士の相互作用、母語や母文化の支援が必要	
内容	日本語の力、認知面の発達に応じて決定 興味関心重視 複数の教科に関わる内容・トピック	各教科特有の学び方と内容・概念を重視 教科学習の経験や力に応じて厳選 必要な場合は学習経験の不足を補う

各教科の目標により、活動展開が具体化

(5) 授業づくりのためのツールの提供

活動を単位化したAU(Activity Unit)とその活動に参加するための表現例

日本語支援の考え方の5つの視点「理解・表現・記憶・自律・情意」と具体例(中学校編)

しかし、普及しない・・・従来からの指摘

現場の指導体制・仕組み
 日本語指導時間・期間が不十分
 言語教育の経験や専門性を有する担当者が不足

カリキュラム自体の問題
 教育内容や「学ぶ力」が具体的に示されていない
 リソースが十分ではない
 担当者の力量への依存が大きい

参考：活動単位：AU (Activity Unit) トピック型「JSLカリキュラム」のAU (全体像)

体 験

A: 知識・経験を
確認する

B: 興味関心を抱く

探 求

C: 観察する

D: 操作して調べる

E: 情報を利用する

F: 分類して考える

G: 比較して考える

H: 条件的に考える

I: 推測する

J: 関連付けて考える

発 信

K: 表現する

L: 判断する

「学校教育におけるJSLカリキュラムの開発について」(最終報告)小学校編 > 資料2 AU一覧(全体)

文部科学省

https://www.mext.go.jp/a_menu/shoutou/clarinet/003/001/008/004.htm

参考：活動単位 (ActivityUnit) と参加のための日本語表現

AUの例 1

例：トピック型 AU C-2
観察する 「形状などを観察する」

参加するための基本表現とバリエーション

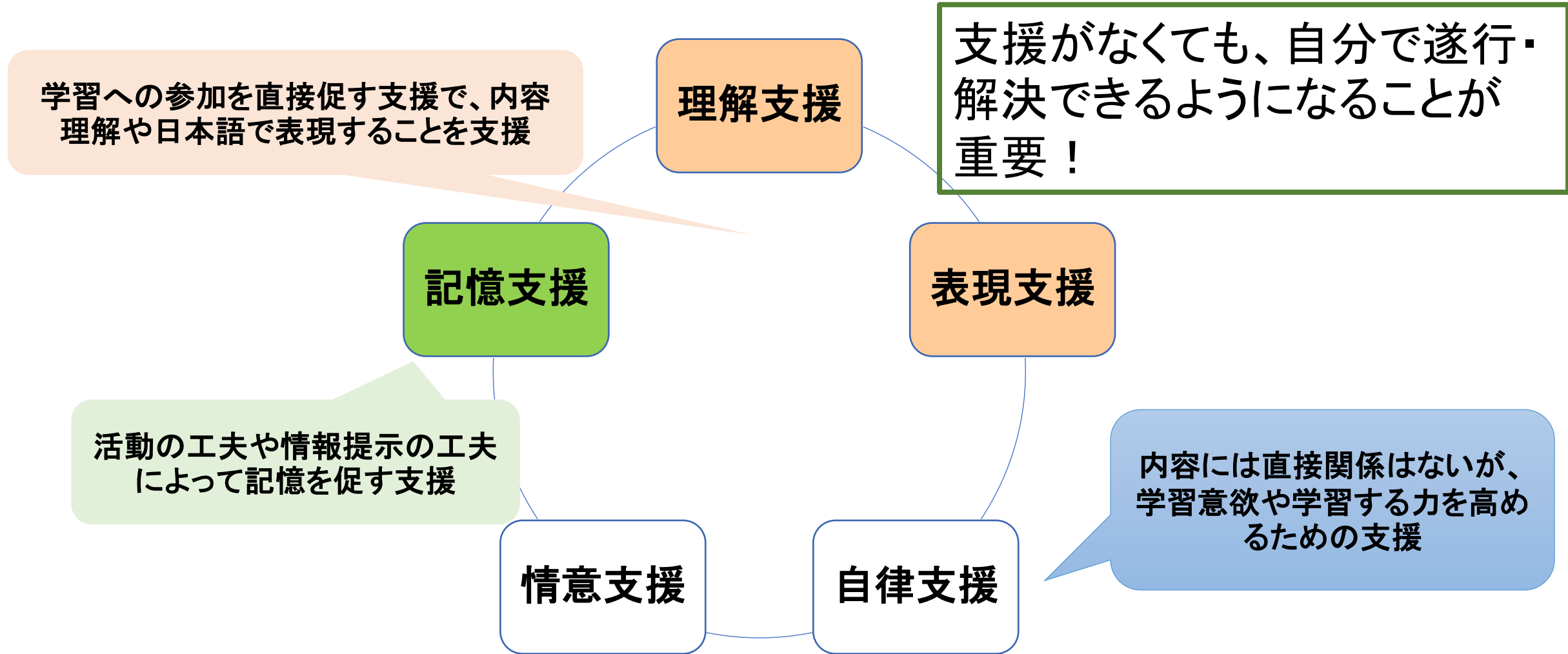
- ・どんな形をしていますか。
- ・どんな形ですか。何みたいですか。
- ・まるいですか。三角ですか。手みたいですか。

- ・手みたいな形をしています。
- ・手みたいです。
- ・まるじゃないです。
はい、手みたい。

AU: 教科の様々な活動から抽出した基本単位となる活動

参考：日本語支援の考え方と方法

(活動参加のためのスキュフォールディング)



参考 学校教育におけるJSLカリキュラム(中学校編)2. 日本語支援の考え方とその方法

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2015/10/06/1235804_002.pdf

2-2 「JSLカリキュラム」実施上の困難(研修参加者の声から) —言語能力・学習・言語教育に着目して—

<研修参加者の声

(感じている困難)>

- ①教科学習に参加できるほど日本語の力が高まっていない。
- ②日本語指導が必要な子どもの場合、教科学習の困難は学習語彙・漢字だ。(指導は、学習語彙と漢字が重要)
- ③通常の授業と「JSLカリキュラム」との違いが判らない。

言語能力・学習・言語教育に関する
認識・前提は・・・

- ①日本語が理解できなければ教科内容を理解できない。
- ②教科学習で重要なのは知識の獲得だ。

本当にそうだろうか？

- ・子どもたちは母語の力、学習する力、学習経験、考える力、能動的に学ぶ力がある。
- ・「学習指導要領」では「何を学ぶか」だけでなく何ができるようになるかどのように学ぶかを重視

単に学習語彙や漢字の知識を得るだけではなく、実社会で生きて働く力が重要

「教科志向型JSL力」 ③通常の教科の授業と何が異なるのか？

授業づくりの流れ	決定すること
<p>在籍学級の授業に関連付ける。 内容を厳選</p>	<p>本語の力、母語の力、教科の学習歴、学習内容に関する事前の経、知識・スキル</p>
<p>1 在籍学級の授業との関連付け</p>	<p>全て取り出し / 一部取り出し、先行 / 途中補習 / 後行</p>
<p>2 学習内容の決定</p>	<p>対象児童の実態に応じて、学習する教科単元の内容を絞り込む</p>
<p>3 目標 日本語の目標を設定</p>	<p>教科内容についての目標(重要な用語・表現の選定) 日本語に関する目標＝教科の目標達成のために、どのような日本語の表現を使って何ができるようになるかを具体的に設定</p>
<p>4 活動 探究型の活動を スモールステップで</p>	<p>各教科の授業展開を、スモールステップで (探究型・問題解決型の授業展開に)</p>
<p>5 日本語表現の決定 活動参加のために</p>	<p>授業内の各活動に参加するための日本語表現 「教師の働きかけ」と「児童生徒の応答・発話」を</p>
<p>6 日本語で理解し表現で きるよう支援を具体化</p>	<p>理解・表現のための支援(視覚化、操作化) 必要な教材・教具(作成する)</p>
<p>7</p>	<p>どの活動で何をみてどのように評価するか</p>

各教科のAUを参照して

インプット・アウト
プット・インターア
クションのための表
現を具体的に設定

「教科志向型JSLカリキュラム」の授業づくりの手続

授業づくりの流れ	決定すること
0 対象児童生徒の把握	日本語の力、母語の力、教科の学習歴、学習内容に関する事前の経験、知識・スキル
1 在籍学級の授業との関連付け	全て取り出し / 一部取り出し、先行 / 途中補習 / 後行
2 学習内容の決定	対象児童の実態に応じて、学習する教科単元の内容を絞り込む
3 目標の設定	教科内容についての目標(重要な用語・表現の選定) 日本語に関する目標＝教科の目標達成のために、どのような日本語の表現を使って何ができるようになるかを具体的に設定
4 活動展開の決定	各教科の授業展開を、スモールステップで (探究型・問題解決型の授業展開に)
5 日本語表現の決定	授業内の各活動に参加するための日本語表現 「教師の働きかけ」と「児童生徒の応答・発話」を具体的に
6 支援、教材・教具の具体化	理解・表現のための支援(視覚化、操作化) 必要な教材・教具(作成する)
7 評価の対象と方法の決定	どの活動で何をみてどのように評価するか

各教科のAUを
参照して

2-2 「JSLカリキュラム」実施上の困難(研修参加者の声から)

—言語能力・学習・言語教育に着目して—

内容と日本語を統合した学びをデザインする上で必要な研修

- ① 実態把握の方法(経験・もてる力を捉える視点の多角化・広角化)
- ② 複数言語環境下の子どもの言語の発達・習得の理解
言語と思考・認知／学力の関係についての理解
- ③ 言語教育の方法についての理解・経験
言語教育の実践的な力の開発
- ④ 自身の授業を省察する力の発揮

✓子どものケースを分析する

✓授業・実践を検討する(研究授業・実践交流)

✓自身の経験・実践を振り返る

授業・学習の具体的なイメージを作り、自身の教育の場で実装化するための新たな視点・アイデアを得ることができる研修が重要

「JSLカリキュラム」の多様な実施方法 実践例から

①小学校での実践（目黒区立東根小学校 田中博子先生）

児童の実態に即したカリキュラム設計による異学年グループでの授業

https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/B2_tanaka.pdf

②中学校での実践例

1単位時間、1枚のワークシートで
国語科・社会科・数学科・理科の学習

（浜松市立浜北北部中学校 市川重先生）

課題とワークシートの工夫で

知的関心を掻き立て

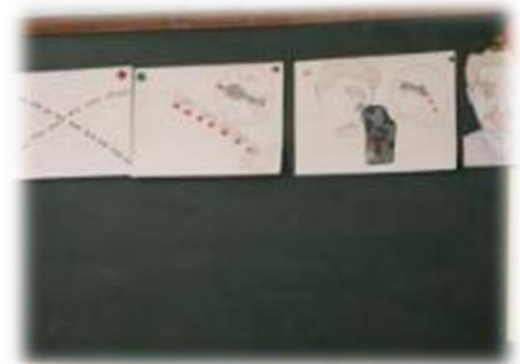
生徒の「学びたい」を生む



（②の当日提示したワークシートは、写真の著作権の関係で配布はできません。ご理解ください。）

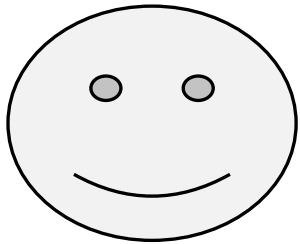
3. 「JSLカリキュラム」の実施に向けた 日本語指導体制に関する課題

- 3.1 指導教員の日本語指導
担当年数と専門性
- 3.2 日本語指導担当教員の配置
- 3.3 日本語指導員・母語支援者
(教員以外) との協働



1 指導教員の日本語指導担当年数と専門性

日本語指導について知らないまま
担当者になることが多い



担当指導主事
日本語指導担当教員

多くは短期間で交代する
※早ければ1年で交代

1 指導教員の日本語指導担当年数と専門性

日本語指導について知らないまま
担当者になることが多い

慣れた頃に交代

担当指導主事

日本語指導担当教員
専門性が培われない

多くは短期間で交代する

※早ければ1年で交代



1 指導教員の日本語指導担当年数と専門性

多くの地域で年1回から2回
概要的な内容

日本語指導が必要な
児童生徒の教育に係る研修

担当者が交代するため毎年同じ内容

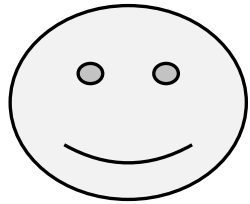
1 指導教員の日本語指導担当年数と専門性

多くの地域で年1回から2回
概要的な内容

日本語指導の具体を
知る機会がない
児童生徒の教育に係る研修

※今年度の研修例
担当者が交代するため毎年同じ内容

2 日本語指導担当教員の配置



日本語指導担当教員

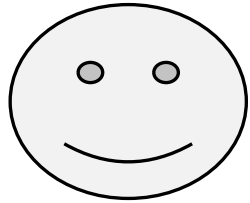


対象児童生徒の現状に応じた、
学校生活・教科学習につながる
日本語指導の計画作成と実践力

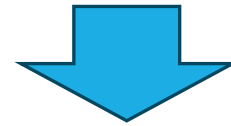


高い志と自己研鑽の力をもつ教員人材が必要

2 日本語指導担当教員の配置



日本語指導担当教員



担当者の決定の多くは校内事情による



希望に沿っていない時短や再任用などの
短時間勤務

2 日本語指導担当教員の配置

教員の異動に係る「公募制度」※平成26年度から

- 「LD等通級指導」「ことばときこえの教室」等
- 採用後6年以上（現任校3年以上かつ2校以上）
- 学校長の推薦
- 担当課が選考し採用

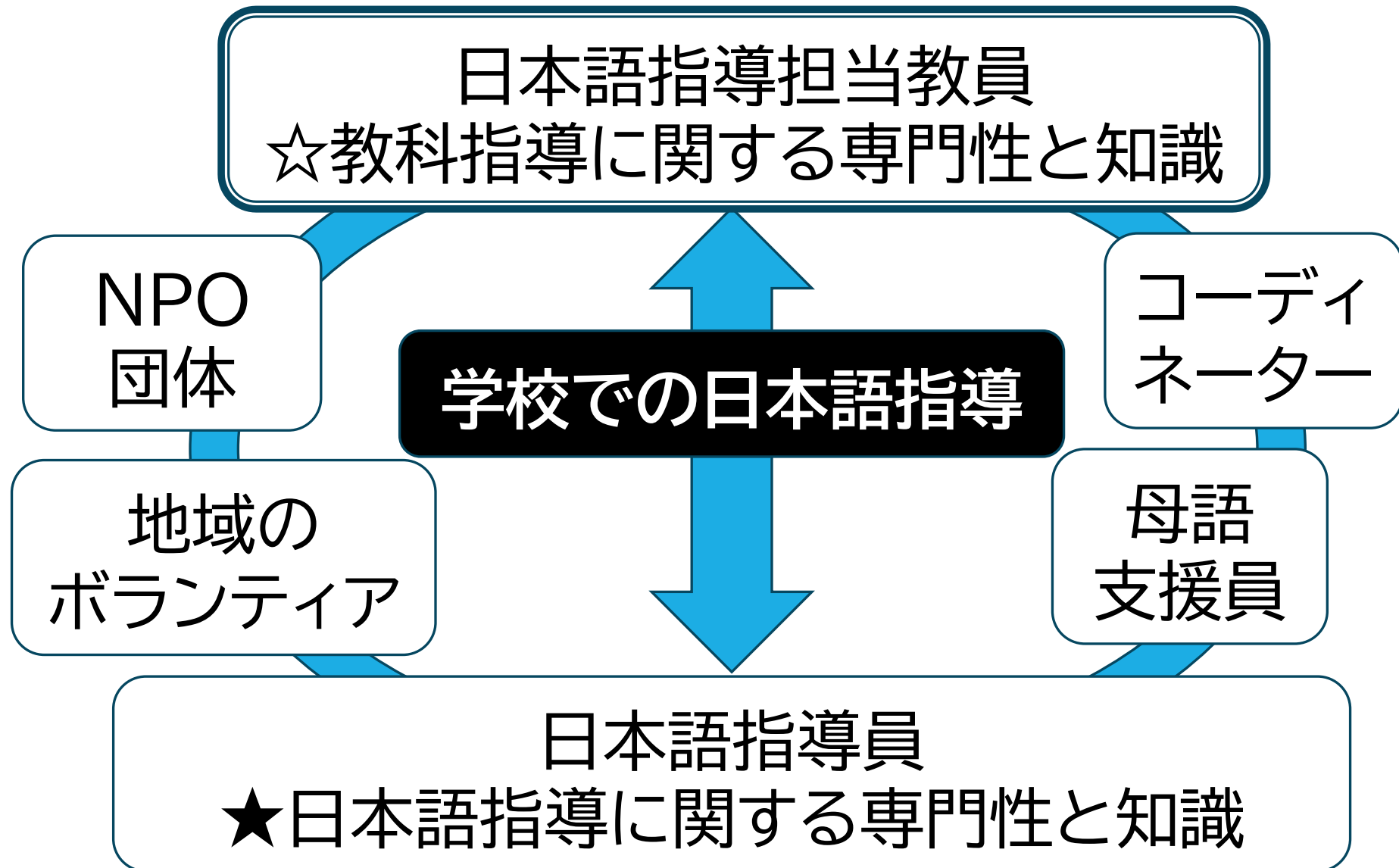


令和7年度までの合計17名採用

※内1名は今年度から担当指導主事

令和7年度現在担当教員17名中13名

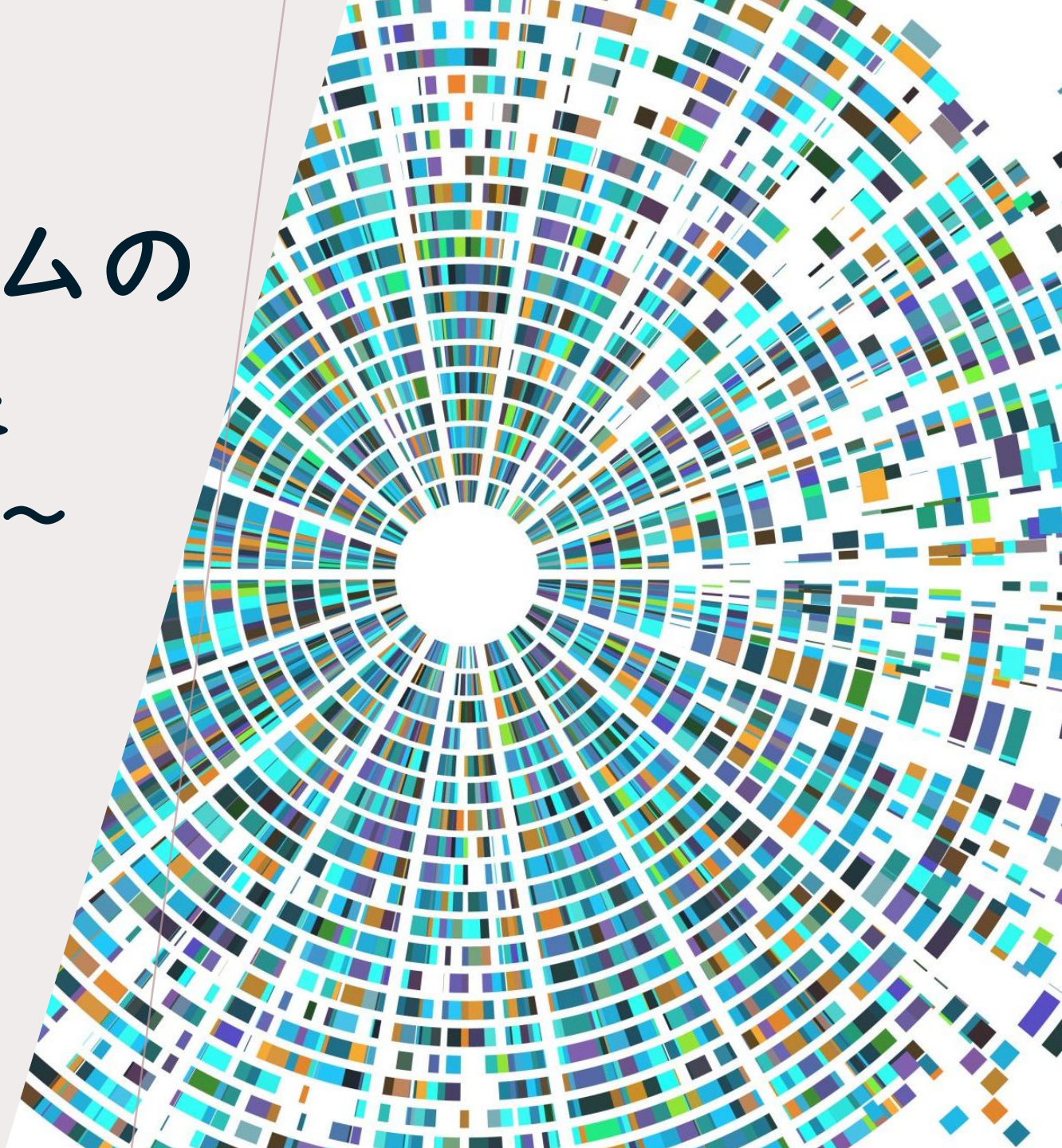
3 日本語指導員・母語支援員との協働



4 JSLカリキュラムの 実施状況と成果 ～横浜市事例から～

横浜市教育委員会事務局

横溝 亮



横浜市の日本語支援における現状

○外国籍・外国につながる児童生徒：約12000人
（そのうち）日本語指導が必要な児童生徒：約4600人

○国際教室設置数：278校

※日本語指導が必要な児童生徒が5名以上在籍している場合、教員を加配

→国際教室担当教員：約350人

各学校の指導内容実施状況

日本語指導が必要な児童生徒在籍校	312校 (国際教室 校)
サバイバル日本語指導	145校 (46.4%)
日本語基礎	198校 (63.4%)
技能別日本語	127校 (40.7%)
JSLカリキュラム	148校 (47.4%)
教科の補習	187校 (59.9%)

文部科学省の調査「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」(令和5年度)

横浜市の日本語指導について

ステージ	学齢期の子どもの在籍学級参加との関係	支援の段階
6	教科内容と関連したトピックについて理解し、積極的に授業に参加できる	支援付き 自律学習 段階
5	教科内容と関連したトピックについて理解し、授業にある程度の支援を得て参加できる	
4	日常的なトピックについて理解し、学級活動にある程度参加できる	個別学習 支援段階
3	支援を得て、日常的なトピックについて理解し、学級活動にも部分的にある程度参加できる	
2	支援を得て、学校生活に必要な日本語の習得が進む	初期支援 段階
1	学校生活に必要な日本語の習得がはじまる	

日本語指導が必要な児童生徒について

対象：JSL評価参照枠
5未滿

指導内容：日本語初期指導、教科につながる指導

※R8年度から「ことばの力のものさし」に変更

JSLカリキュラムに関する研修

研修名	実施時期	対象	内容
日本語指導者養成講座① (年間7回実施)	4月	国際教室初担当者 悉皆研修	<ul style="list-style-type: none">・ JSLカリキュラムの考え方・ 日本語と教科の統合学習の事例
横浜市日本語支援 アドバイザー研修会 (年間9回実施)	6月	国際教室担当者 任意参加	<ul style="list-style-type: none">・ JSLカリキュラムの考え方・ 実践報告
国際教室授業公開 (年間10校公開)	7月～ 1月	国際教室担当者 10回のうち1回は必ず参加	<ul style="list-style-type: none">① JSL国語科の授業公開 2年生「紙コップ花火の作り方」 5年生「クラスみんなで決めるには」② JSL国語科の授業公開 1年生「どんなおはなしができるかな」③ JSL国語科の授業公開（オンライン） 5年生「より良い学校生活のために」④ JSL国語科の授業公開（オンライン） 4年生「調べて話そう、生活調査隊」

研修受講者の振り返り

- 授業を参観する機会が限られている中で、授業実践を見れる貴重な時間となった。この学びを真似したり、自分なりにアレンジしたりして取り組んでいきたい。
- JSLによる教科学習について、目標設定や進め方、子どもとの関わり方などを知ることができた。内容理解のためには、視覚に訴える教材や体を使って感じ取る教材などを設定する必要性を感じた。日本語が母語ではない子どもの意欲・関心を持続させるための仕掛けを考えたい。日本語初期前半の子どもに対する、JSLによる教科学習も積極的に実施していく勇気を得られた。

実践の共有

いつでも他校の実践が見られる (driveを利用する)

教科指導

国際教室運営

日本語指導

① 実践の内容(いずれかに○をつけてください)
国際教室運営・日本語指導 教科指導 その他()

② 実践の概要(実際に使った資料や写真などがあれば添付していただけるとうれしいです)
【実施の背景】
校内の重点研の授業をすることになり、指導案を書きました。以下のことを考えて授業を考えました。
・国際教室担当者が国際教室と在籍級の連携を重視して取り組んでいる
・国際教室で学んだことが在籍級の授業で生かされるように考えて指導案を作成した
・日本語支援が必要な児童は学習のとき何に困っているのか

【実施時期】
9月中旬

【実施の方法】写真や使った資料等があるとわかりやすいです。
2年 国語 「どうぶつ園のじゅうい」

○用意したもの
・ルビ付き、分ち書き、言葉の意味付きの教科書
(教科書と同じ文章を打ち直し、A4で印刷)
・マグネット付きのワークシート
・単元の流れが分かる掲示物

○単元目標
(日本語) 時間を表す言葉が分かる。
(国語) 時間的な順序を考えながら、内容の大体を捉えることができ、文章の内容と自分の経験とを結び付けて、感想をもつことができる。




○本時の流れ
めあて じゅういさんが いつ なにをしたか 読み取ろう。
① 絵本の読み聞かせ
② めあての確認
③ 絵本を聞き、時間を表す言葉の意味を説明する。

① 実践の内容(いずれかに○をつけてください)
 国際教室運営 日本語指導 教科指導 その他()

② 実践の概要(実際に使った資料や写真などがあれば添付していただけるとうれしいです)
【実施の背景】
普段は算数の教科指導しか行っていませんが、管理職が個別と国際教室と初任者3名の授業を見てほしいと指導主事をお呼びしたことや、国際教室らしい授業を見せてほしいということだったので、4年生の国語「冬の楽しみ」を実践しました。

【実施時期】
12月6日

【実施の方法】写真や使った資料等があるとわかりやすいです。



アドベントカレンダー

実践共有シートの作成

・国際教室運営、日本語指導、教科指導、その他の項目で、担当者が実践共有シートを作成

・A4・1枚にまとめる

シートを見た人がイメージできるように、個人情報に配慮し、実施の様子などを掲載

・教育委員会が運営するドライブにいつでも閲覧できるようにする

成果

- より良い実践を積極的
担当者にJSLカリキュラムを
授業を公開する
先生方をエンパワメントする
- 先生方も強みを活かす（授業を実施）
教科指導は得意
教科の専門性を活かす
- 実践を共有する場をつくる

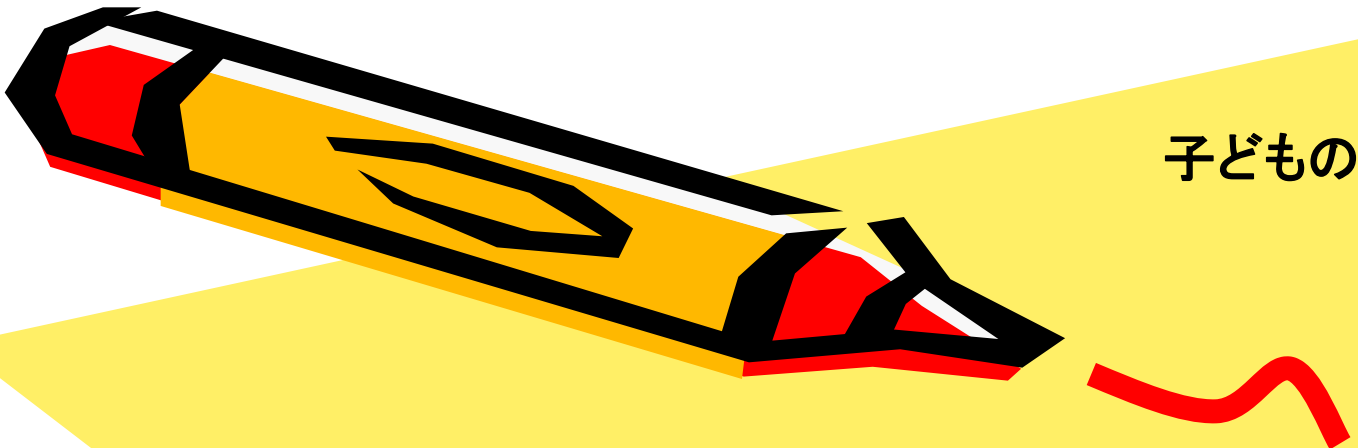
日本語と教科の統合学習が
できそう！

教育委員会事務局の役割

- ・ 日本語指導の明確な設定

〈日本語指導の再定義〉

日本語指導においては、語彙や文法等の指導に偏ることなく、継続的・長期的な見通しのもと、3つの「言語の力」（コミュニケーションに必要な言語の力、教科等の学習に参加するための言語の力、自己実現のための言語の力）を総合的に育成することを通じて、多様性を強みとして人生を切り拓く力を育成する指導として改めて捉え直す。



2026年2月28日

子どもの日本語教育研究会 第11回大会
パネル発表

5. JSLカリキュラム実践例

- 5. 1 JSLカリキュラム授業づくりのポイント
(理科4年「かん電池のつなぎ方」)を通して
- 5. 2 JSLカリキュラム実践例
(社会科5年「自然条件と人々の暮らし」)



甲府市立 伊勢小学校 教諭 今澤 悌

※ 本スライドのイラスト引用: ジャストシステム等

5.1 JSLカリキュラム授業づくりのポイント

小学4年 理科「かん電池のつなぎ方」

教科の目標

- 乾電池の向きを変えると、電流、モーターの回る向きが変わることが分かる。

「教科の目標」を達成するための
「日本語の目標」を設定

日本語の目標

- 「～すると～になる」「～は～によって変わる」の表現が使って、乾電池の向きと電流・モーターの関係が分かる。
- 実験に使うものの名前がわかる。

学習活動

予想を立てる

「～すると～になる」と思います。

表現モデル

表現支援

実験をする

実験図

「～するとどうなった？」
「～すると～になった！」

ワークシート

理解支援

やりとり

実験器具カード

結果をまとめる
考察する

「～すると～になった。」
「このことから、～ということがわかる。」

表現モデル

ワークシート

結果と考察を発表する。

「～すると～になりました。」
「このことから、～ということがわかりました。」

表現モデル

身につけさせたい語いや表現(日本語の目標)を学習活動の中に埋め込む。

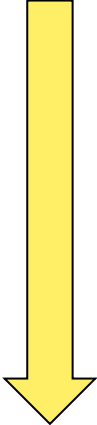
様々な支援の元に**学習活動に参加する**中で、教科の力を養う。

同時に日本語を学び、繰り返して使うことにより定着していく。

実践事例 「自然条件と人々の暮らし」(5年)

〈在籍学級の目標〉(指導書より)

「気候や地形などの自然条件の異なる人々の生活を、自分たちの住んでいる地域の生活と比べながら具体的に調べ、国土の自然の特色や自然条件に適応して暮らしている人々の工夫や願いを捉えさせる。」



* 在籍学級では、特色ある地域について、自然の様子、産業、暮らしのくふう等を調べてまとめ、自分たちの地域と比べて考察し発表する活動を行う。

◎ JSL社会科の目標(教科としての目標)

- 自然条件の異なる人々の生活を、ワークシートを使って調べたり自分たちの地域との違いを比較することができる。
- 工夫や願いを考察し、表現モデルを使って発表することができる。

☆「自然条件と人々の暮らし」(5年)

◎ JSL社会科の目標(教科としての目標)

- 自然条件の異なる人々の生活を、ワークシートを使って調べたり自分たちの地域との違いを比較することができる。
- 工夫や願いを考察し、表現モデルを使って発表することができる。

※ 教科の目標を達成するためにはどんな日本語の力が必要か

おさえない語彙:「気温」「降水量」「台風」「零下〇度」「～に備えて」等

◎ 日本語の目標

■ 調べた地域と自分たちの地域と比較するために

- ～は、～(わたしたちの住む～)と比べて～だ。
- ～は、わたしたちの住む～には見られない(～と同じ)～がある

■ 工夫や願いを考察し、発表するために

- そのわけは、～では～で、それを生かして(～にそなえて)～しているからです。 ●～ということがわかりました。

理解支援

写真やグラフを見比べて、違いを考える。

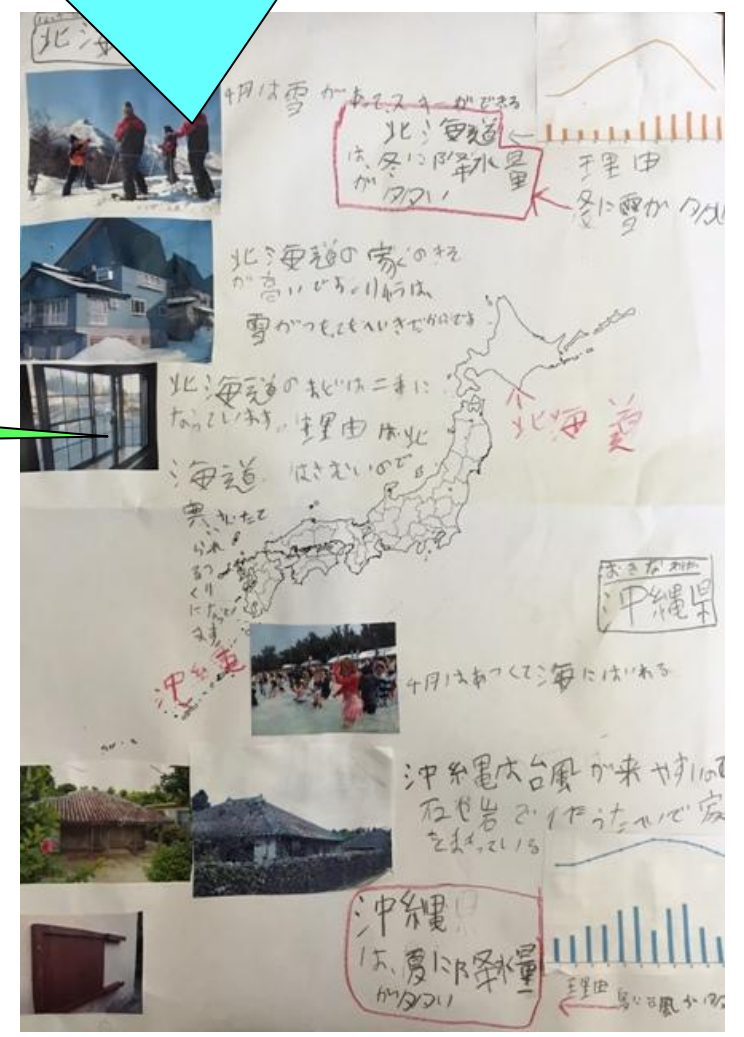
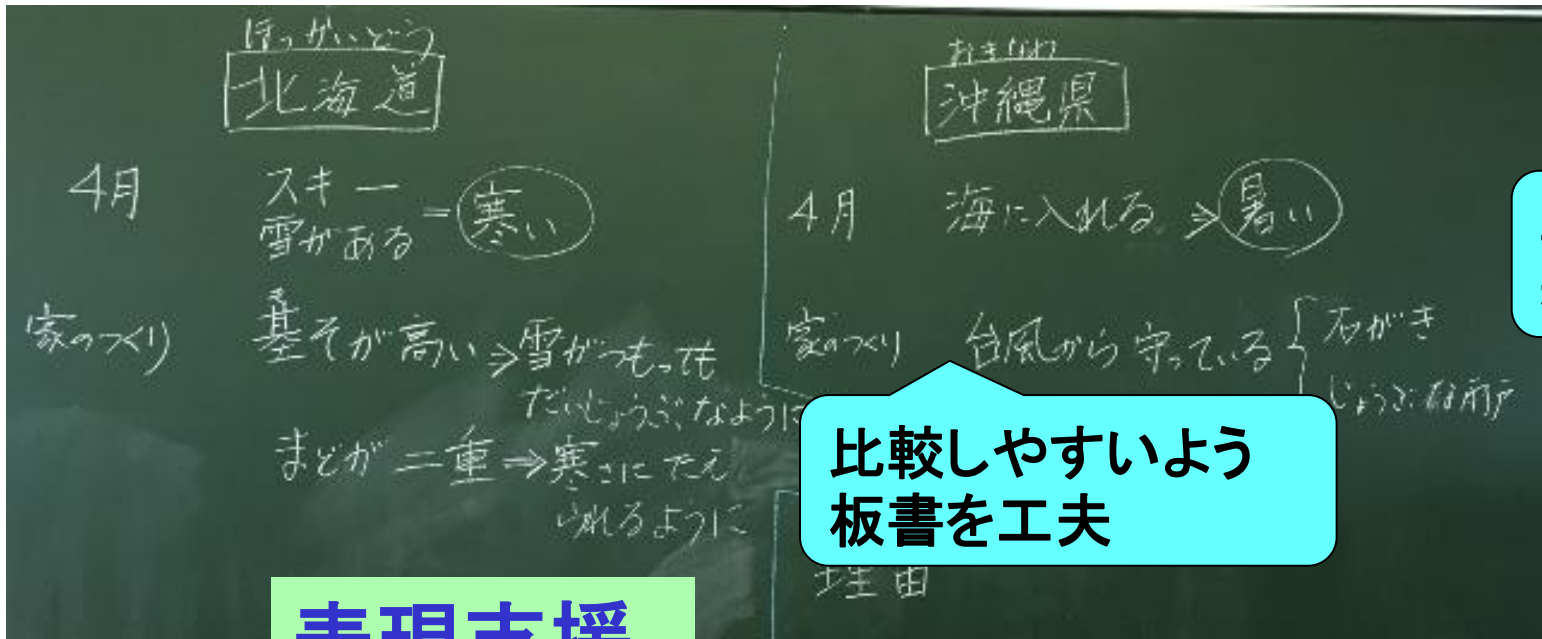
比較しやすいよう
板書を工夫

表現支援

気がついたこと、考えたことを、フォーマルな表現・書き言葉に

「～は～です。～は～になっています。」
「理由は～からです。」

- 比較して考える、論理的に考える
- 考えたことを、理由をつけて相手に分かるように伝える。



見つけた、気づいた

～は～になっ
～は(いつ)～が多いぞ。
(少ない)

理由をつけて言う

～からぞ。
(だから)

～なので～
(ので)

比較して気づいたことや考
えたことを、表現モデルを
参照しながらワークシート
に記入

北海道

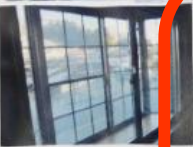


4月は雪があまりあ
りません

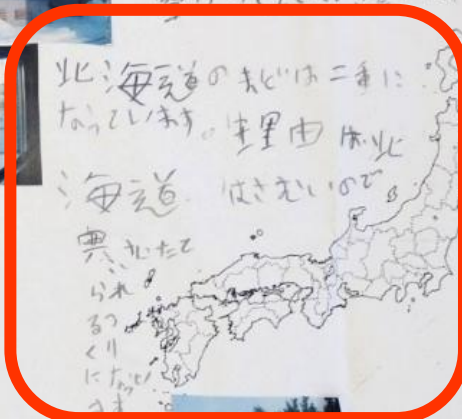
北海道
は、冬に降雪量
が多い



北海道の家は
高い



北海道の気候は
寒い



北海道

中継電台

沈む

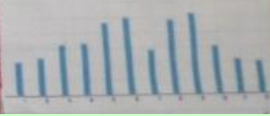


4月はあつて海にはいれる

中継電台台風が来やすい
石や岩で作った家で
住んでいる



中継電台
は、冬に降雪量



在籍学級で発表！

ディスカッション : 今後のJSL実施に向けての課題 (ここまでの発題をもとに)

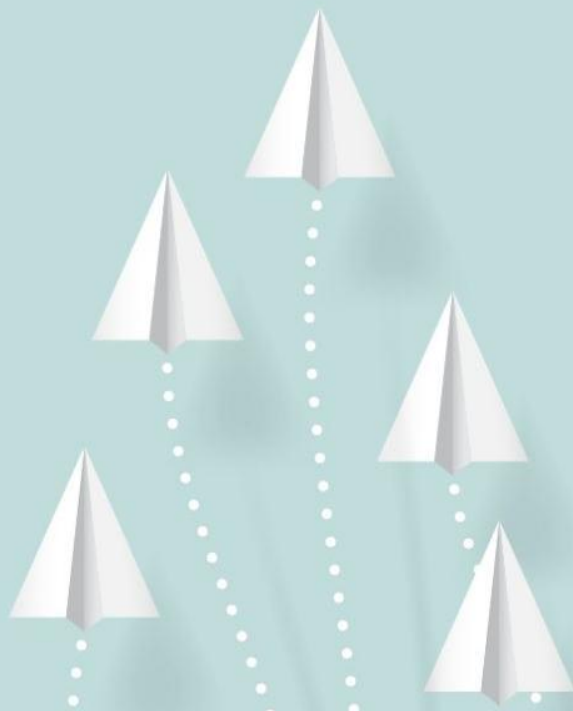
- 1 「JSLカリキュラム」の具体的なイメージをもつための場を創るには。
……授業研究会・動画による視聴機会など
- 2 教員・「日本語指導員」・母語支援者など、多様な立場の人がJSLカリの授業を作る機会をもつために。
…子どものことば・学習プロセスについての理解を深め、実施方法の多様な可能性を探る。
- 3 研修企画者(担当指導主事)の育成

パネルディスカッションで例示されたJSLカリキュラム実施上の工夫

- 在籍学級の担当教員にお願いしていた支援の工夫
 - 日本語での表現モデル例の提示
 - 資料をわかりやすく提示
- 文章理解が難しいという場合の工夫
 - デジタル教科書の活用 挿絵の並び替えて理解の確認
 - 音声でなら理解で切りることが多い(デジタル教科書の読み上げ機能の利用)
- 国語科で本文と挿絵を並べ替える。
 - わかることを手掛かりに並べ替えるプロセスで内容の理解が促される。
 - 類推し、予想しながら読む力を育む。
 - すべての語彙や漢字・文構造がわからなくても、理解可能だという経験を！
- 学校でのチーム体制
 - 学級担任などに、日本語教室の授業を見てもらう
 - …感想として「トピック型ならできそう」という声も

参考文献・「JSLカリキュラム」実践例採録書籍等

- ・外国人児童の「教科と日本語」シリーズ
佐藤郡衛・齋藤ひろみ・高木高太郎（2005）『JSLカリキュラム「解説」』
JSL会キュラム研究会（池上摩希子・今澤悌・大蔵守人・齋藤ひろみ）著『JSL「国語科」の授業づくり』
『JSL「社会科」の授業づくり』
『JSL「算数科」の授業づくり』
『JSL「理科」の授業づくり』
- ・「JSLカリキュラム」の理論的背景などについて解説
川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広（2009）『「移動する子どもたち」のことばの教育を創造する：ESL教育とJSL教育の共振』ココ出版
- ・大菅佐妃子（2012）「日本語指導が必要な子どもたちの学力保障を目指して—日本語教室設置校、少人数在籍校における取り組みから見えてきたこと」『言語教育実践イマ×ココ』創刊準備号 pp.38–47
- ・齋藤ひろみ（2019）「JSLの子どもを対象とする内容重視の日本語教育—日本国内の実践・研究の動向から—」『第二言語としての日本語の習得研究』12号、pp.10–27
- ・齋藤ひろみ・佐藤郡衛編（2009）『文化間移動をする子どもたちの学び—教育コミュニティの創造に向けて』ひつじ書房
- ・齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子編著（2015）『外国人児童生徒の学びを創る授業実践 「ことばと教科の力」を育む浜松の取り組み』くろしお出版
- ・横溝亮（2022）「小学校における国語科学習支援の取り組み」齋藤ひろみ編『外国人の子どもへの学習支援』金子書房、2022、pp.41–49



ありがとうございました。